

# ニ強くてサガ ニユースガ7

N E W S A G A

阿部正行  
Abe Masayuki

## ウルザ

美しいエルフの精霊使い。  
カイルの村を訪れ、  
なし崩し的に仲間になる。



## セラン

カイルの幼馴染で、  
女の子に目がない  
ムードメーカー。



## カイル

主人公の魔法剣士。  
一度魔王を倒したが、  
真紅の宝石の力で過去に  
戻り、再び冒険を始める。



## サキラ

グローリアス  
『輝かしき』の名を持つ  
スーラ聖王国の聖女王。  
「神に最も近い」とも言われている。



## レイラ

カイルの剣の師匠にして、  
セランの養母。  
実はメーラ教徒  
だったことを明かし、  
カイルをスーラ聖王国に  
呼び出す。



## ソウガ

伝説の「シノビ」であるミナギの師匠。  
カイルの目前でガルガン帝国第二皇子  
を暗殺した。



暗殺をはじめとする闇の技術を  
受け継ぐ「シノビ」一族出身の美女。

## ミナギ



おさなしみ  
カイルの幼馴染。  
格闘の才能があり、  
その腕前はかなりのもの。

## リーゼ



## シルドニア

マジックキング  
伝説の『魔法王』が  
自分の人格や知識の一部を  
複写した魔剣の精神体。

Main Characters  
主な登場人物

スーラ聖王国。この世界唯一の宗教国家。

国家と言っても国土が都市一つ分しかない都市国家だが、じしぞく人種にとっては人種領の中で最も神聖とされる特別な場所だった。

「――の割に見た目は普通の都市国家……いや、街だな。とても世界創世の地には見えねえ」  
聖王国の街並みを遠目に見ながら、そんな感想を漏らすのはセラんだ。

「あんまり大きな声でそういうことを言うな」

カイルが周りに気を遣って小声で注意するが、セランは肩をすくめるばかりである。

今カイル達がいるのは聖王国に繋がる街道で、周りを歩いている人のほとんどが聖王国を目指す巡礼者だ。彼らにしてみれば、自分達が神聖視している場所をぞんざいに言われるのは当然不快だろう。

とはいえ確かにセランの言う通り、少なくとも遠目には目立つ所はない。ただ一つ、街の中心に

ある塔が目惹くことを除いては。

それは鋭角的で、ところどころ角のような物が生えている、芸術的ともとれる変わった塔だった。「あれが有名な『始まりの塔』ね……」

世界創世の神話に関わるその塔の名を、ミナギが呟いた。

曰く、この世界ははじめ完全な無であつたのだが、どこからか神々がやってきて、まず自分達が住まうためにあの塔を造つたそうだ。

そこから神々は大地を作り、空を広げ、太陽や月や星々を生み出し、人間や亜人をはじめとする動植物も誕生させ、最後に魔族を創造し……今ある世界の全てを作つた。そうして役目を終えたと、塔から天に昇つたという。

本来はもつと長く細部に亘るのだが、これが世界創世神話の大まかなあらすじだ。

そういうわけで、始まりの塔のあるこの地はいずれの神を信仰する者にとつても共通の聖地となつており、熱心な信徒であれば生涯に一度は巡礼するというのが目標になっている。

現に周りにいる巡礼者は人間だけではなく、数こそ少ないもののエルフやドワーフといった亜人も見かけられる。彼らが首から下げている聖印も、大地母神カイリスや商売の神マラナイ、鍛冶の神レガネなど様々だ。

「でもよ、天に昇つたという割には低いんじゃないか？」

またもセランが不敬と取られかねない感想を漏らすのが、実際始まりの塔はそれほど高い建物ではなく、主要都市にある城や大神殿などの方が高いだろう。

「何でも聖王国では、あの塔より高い建物を建ててはいけならしい。そのためなのか城壁もないそうだ」

巡礼者に始まりの塔を見やすくするためでもあるのだろうか、とカイルが自分で付け足すと、セランは少し呆れの籠つた感想を言う。

「城壁なしどころか、聞いた話じゃ聖王家は軍どころか警備する兵もないんだろ？ ……物騒だが、聖王国を攻める者などいないんだろなあ」

この時代、城壁がない都市というのは危険もいとところなのだが、聖王国はその神聖さから絶対不可侵とされていた。人族の全統一を国是として掲げるガルガン帝国ですらも直接には手を出さず、敬意を持つて対応している。

それどころか、何故か意思を持たない魔獣でさえ近づかないのだ。それは神々の威光のおかげともいわれ、人族領で最も安全な場所としても知られている。

(まあ、結局は幻想だがな……すがつたところで救いはなかった)

カイルは心の中で愚痴つた後、軽く首を横に振る。

かつての——現状ではこれから起こるであろう魔族の総攻撃『大侵攻』の際、カイルが直接見た

わけではないが、この聖王国も容赦なく襲われたと聞いていた。

どういった状況になったかの詳細を知らずとも、城壁もなく兵もいないとなれば、その惨状は容易に想像できる。

(神に救いを求めても応えてくれるわけじゃないんだよな……)

カイルも一応は女神カイリスを信仰しているが、それは両親がそうだからであって、決して熱心な信徒ではない。それどころか、少なくともこの二度目の人生で神に祈ったことはなかった。

祈っても無駄だとは言わないが、祈る暇があるなら剣を一回でも振って強くなった方がいい、そう考えているからだ。

「ふむ、変わつたらんな、あの塔は……ザールスの時代から多くのものが変わったというのに……恐らく千年先も、二千年先も変わらぬのであろうな」

始まりの塔を見ながらとりとめのないことを考えてしまったカイルを現実に戻したのは、何やら感慨かがい深ふかげなシルドニアの声だ。

千年以上も昔——人族が最も栄えた、魔法王国ザールスが世界を支配していた時代。その最盛期に魔法王マジックキングとして君臨していたシルドニアなのだから、当然あの塔についても知っているようだ。

「有史以来、あの地は聖地であった。特に始まりの塔だけはザールスの優すぐれた技術、魔法文明でも解析はできず、神の奇跡として認めざるを得なかった。だからこそザールスの時代でも、あれは人

が手を出すべきでない不可侵のものとした……人族が、いや世界がなくなるまで、あの地が聖域であるのは変わらんじやろうな」

「何か壮大なことを言ってるな……」

世界の終焉まで口にしたシルドニアの重々しい口調には、微妙な空虚さも滲にじんでいるようにカイルには感じられた。

だが、それを訊く前に今度はウルザが気になる言葉を吐く。

「そして、メーラ教の神殿があるのもこの国だけか」

そう言う彼女は心なしか強張った顔つきをしていた。

聖王国のもう一つの特徴として、あらゆる信仰が認められる点がある。他の国では邪教として扱われているようなものでも、ここではおおびらに信じるのが許されるのだ。

実際のところ、魔族を守護しているという名も知れない闇の神に対してさえ、他と区別なく信仰が認められる。

ただ流石さすがに信者はいないようで、街の片隅に小さな祠ほこらがある程度らしいが。

となれば、人間のみを愛し、他の人族を排斥はいせきしようとする女神メーラを崇あがめる宗教も当然認められており、信徒が集ひらう神殿も存在する。

エルフであるウルザからしてみれば、自分に危害が加えられかねない場所なのだから、緊張もす

るだろう。

「大丈夫だ。信仰が認められているだけであって、犯罪行為が許されるわけではない。むしろ聖地でそんな真似をする奴はいない。あそこはそういった規律には厳しいからな」

「そうか……ならば私もムーナ様の神殿を参拝しよう」

カイルの説明を聞き少し安心したようで、ウルザは精霊と月の神で、エルフの守護神でもある女神の名を出す。

ウルザはその敬虔な信徒であり、聖地に来るのはそれなりに嬉しくもあったようだ。

「でも何で、レイラさんはここに来いなんて言ったんだろう」

リーゼが不安そうな声を出す。

カイル達にこの聖王国へ来いと言ったのは、セランの養母にしてカイルの剣の師でもあるレイラだ。

リーゼにとつても家族同然であるレイラがメーラ教に関わっており、自分達と敵対するかもしれないとカイルから聞かされたとき、リーゼとしてはいったい何の冗談かと思ったものだ。

それが真実だと解った今でも、レイラが何を思っ呼び出してきたのか、その意図は想像も付かない。

「それについては……本人に訊こうじゃないか」

「!? ああ、そうだな……」

カイルが聖王国の方を見ながら声を一段低くすると、一瞬驚愕したものの、それに呼応するようにセランも目つきを鋭くする。

目の良い二人には、これだけの遠距離であっても、聖王国の入り口付近でこちらを待つかの如く立っている人影が見えたのだ。

それは間違いなく、カイル達のよく知るレイラだった。

「いきなりお出迎えとは……まあ、こそこそするタイプじゃないしな、おふくろらしい」

不敵な笑みを浮かべるのはセラン。

「ど、どうするの？」

まさかこうも早く出会うとは思っておらず、心構えが出来ていないリーゼが、カイルの袖を引っ張り訊いてくる。

「どうするも何も……このまま行くしかないだろ」

こちらが気付いたということは、当然レイラの方も気付いているはずで、今更身を隠したりしても無駄だ。

「そういうことだ、退くわけにはいかねえよな」

背を向けてたまるかとはかりにセランが歩みを早めると、リーゼも覚悟を決めたのかそれについ



て行き、他の者もそれに続く。

「波乱が多そうだな……しかし、またこの国に来ることになるとは」

最後尾についたカイルは天を仰ぎたい気分になったが、すぐに気を引き締め直すと、ただ前を、  
聖王国の始まりの塔を見据えて歩き始めた。

2

「よう、早かったじゃないか」

待ち構えていたレイラはカイル達の姿を見つけると片手を上げ、気軽に挨拶した。

それは故郷リマーゼでよく見た、見る者に好感と頼もしさを覚えさせる、全く変わらないいつもの笑顔だった。

「……わざわざ出迎えてくれるなんて、珍しく殊勝しゅしょうじゃねえか」

それに対して挑発するかのような憎まれ口を叩くセラン。その声に籠められた敵意は、とても義母に向けるものではない。

「……………」

カイルもセランと同じように、最大限に警戒を含ませた視線を、己おのの剣の師匠であるレイラだけでなく周囲にも向けている。

見る者が見れば、今にも戦いが始まるのではないかという緊張感が伝わっただろう。まさに一触即発という雰囲気だ。

「そりゃこっちが呼びつけたんだ、迎えぐらいはしてやらないとな」

だがレイラはそんな義息と弟子の態度を平然と受け流し、余裕ある様子を崩さない。

そんなレイラに、カイルは事前に懸念していた通りのやりにくさを覚えた。

(やっぱり面と向かうと……こういう展開になっちゃうか)

純粋な強さ弱さの問題ではなく、幼い頃から上下関係が完全に決まっている間柄あいだがらなのだ。骨の髄ぐまで染み付いた関係性は、そう簡単に振り払えるものではない。

何より、レイラはこちらのことを知り尽くしている。そこが厄介だ。

セランも同じことを感じていた様子で、レイラに向ける視線が早くも揺らぎ始めているのが見て取れる。

「あ、あのレイラさん……」

ここで、恐る恐るといった具合にリーゼが話しかけた。

すると、それまでは近所の悪ガキ二人を相手にしているかのようなようだった態度のレイラが、罪悪感

を滲ませたような困った表情を浮かべる。

「あー……そんな深刻そうな顔しないで」

彼女にしては珍しく、決まりが悪そうに後頭部を掻きながらレイラは言った。

レイラもリーゼに対しては甘い、というか弱い。

カイル達母子おやこ同様、料理どころか家事全般に全く向いていないレイラも、村での生活はリーゼに依存する割合が大きかったのだ。人間、胃袋を掴まれている相手には頭が上がらなくなるものなのである。

「いやリーゼ、そこはもっと強気に言ってくれ！ 日頃言えないこともあるだろうから、いい機会だぞー！」

「そうだ、この駄目母に普段からの不満もぶちまけてくれ！」

自分達では分が悪いと悟ったカイルとセランがリーゼを煽あおる。

「お、お前らここぞとばかりに……まったく、リーゼちゃんにこんな不安げな顔させるなんて情けないな。もっと頼りがいというものを持って」

そしてレイラにも依存の自覚はあるため、どうにか話題を逸そらすべく、負けじとカイルに矛先ほしざきを向けようとする。

「ああ、そこらへんはもう諦めてるから。カイルの負の個性と違って受け入れてるの」



「何か普通に怒られるより心にくるな……」

達観したかのようなリーゼの物言いには、カイルも流石に傷ついた顔になった。

先ほどまでの緊張感が一瞬で失われ、故郷でのよくある一幕になりつつあることに、カイルもセランも、そしてリーゼもどこか安堵あんどしていた。

事前に懸念けんねんしていたレイラとの徹底的な対立。そうはならないだろうと予想していたが、やはりほっとしたのだ。

「ごほん……とにかくだ、何度も言ってるけど、あたしはお前達に含むところは一切ないし、敵対するつもりもない」

このまま話が脱線してぐだぐだし続けるのはまずいと、わざとらしい咳払いまでして気を取り直したレイラは、あくまで立場の違いだと改めて主張する。

「ただこっちにも事情があつてね、そしてそれを説明するため……いや、解ってもらうためにここに呼び出したんだ」

「それは解った……じゃあその事情とやらを説明してもらいたい。こっちだってそのために来たんだ」

言い聞かせるかのような物言いのレイラに、カイルもまた気を引き締める意味で居い住ずまいを直し、彼女を正面から見据える。

「勿論だ——と言いたいところだが、まだちょっと都合が悪くてな。そうだな……あと二、三日待つてほしい。宿は用意してあるから、觀光でもしててくれ」

するとレイラは顎あごに手をやり、何かを思案するような表情を浮かべた。

「何だそりゃ、人を呼びつけといて段取り悪いな」

「……あ？」

セランが反射的に悪態をつくと、レイラの片眉の角度が軽く上がる。

レイラと親しい者にはよく解るのだが、これは彼女の機嫌が悪くなったときのサインで、カイル達三人は反射的に身を固くする。

「……だから言っただろ、早かったなって。元々、お前達が来るのはセラリアの出産が終わってからだと思っていたから、こっちはそれで予定を立ててたんだよ……それなのに、こんなに早く来やがって」

責めるような、いや間違はなく責める言い方で、レイラはカイルを睨みつけてくる。

恐らくあと十日もしないうち、早ければ今日明日にでも、カイルの母親であるセラリアに子供が、つまりカイルにとつての妹が生まれる。

それを解っていないながらセラリアの側から離れてこの聖王国に来たことが、レイラは気に入らなかつたのだ。

「セライアの大事だつてのに、こっちの方を優先させるとは何を考えてるんだ」

そもそも難産になりそうだというので、セライアは無理をしてまで、お産の助けになる神聖魔法の使い手が多い帝都ルオスを訪れていたくらいだ。彼女とは古くからの友人であるレイラも心配なのだろう。

「いや……呼び出したのはそっちで……」

だがカイルからしてみれば、それも理不尽な話と言える。確かに母親のことも気にはなつたが、聖王国に來いと言つたのはレイラなのだから。

しかしここでカイルは思い出した。そういえばレイラは、昔から言葉が足りなかつたことを。

これぐらい言わなくても解るだろという前提で勝手に判断して行動するため、それで起こつたトラブルも一つや二つではない。

今回もレイラの中では、カイルが来るのは無事に生まれた後でと決まっていたのだろう。

「普通は母親の方を優先するだろうが！」

カイルは殺気すら籠つた怒声に首をすくめる。そして、このまま機嫌を損ねるのはまずいとい何とかなだめようとしかけたところで、背後から不意打ちを受ける。

「あ、それはあたしも思つてた。ちよつとくらい待つてもよかつたのに……」

レイラに同意して抗議の声を上げたリーゼに、カイルは裏切られた気分になつた。

リーゼとしても、家族同然であるセライアの出産となれば是非とも立ち合いたかつたが、カイルの緊迫した事情も理解していたので強固に反対はしなかつた。しかし不満はあつたのだ。

「いやだつて……俺がいたつて意味ないだろ？」

そして、無神経で氣遣いゼロなカイルの言い訳に、今度はリーゼが憤慨する。

「こういうときは家族に側においてくれた方がいいに決まつてるじゃない！　そういうところに氣を回せないから、カイルは駄目なのよ！」

「いや、だつて……そういうのは普通、親父の役目だろ？」

あまりの劍幕に、普段は存在そのものを忘れがちな父親に責任を押し付けてしまうカイル。

さつきは受け入れてくれるつて言つたのに……という声にならないカイルの呟きにも構わず、リーゼの駄目出しは更に続いた。

「セライアもこんな薄情な息子を持つて可哀想に……」

多分に芝居がかつた動作であるのは明らかながら、レイラが怒りより嘆きを多分に含ませた深い溜息をつく。

それに同意するような侮蔑の視線を、はじめに同意したリーゼのみならず、これまで黙つて話を聞いていたウルザとシルドニアまでが、カイルに投げかけ始めた。

「……じゃあ宿屋の方に行くよ」

四面楚歌を味わいつつあるカイルは逃げるように、というか実際に逃げるために、その場を離れたようにした。

「北部地区にある『森の湖畔』という名の宿で、あたしの名前を出せばいい。ああそれと……」

レイラは、ここまで一切の口出しをせず、黙ってカイルの後に続こうとしていたミナギの背に声をかける。

「……ソウガも今は所用で不在だ。ただやっぱり数日後には戻って来る。安心していいぞ」

「……………」

ミナギは一瞬だけ動きを止めたものの、やはりレイラに目を向けないままカイルについて歩いていく。

レイラもそれ以上は何も言わず、肩をすくめ、後で連絡するだけ言い残して立ち去った。

「いいのか？」

「ええ……」

カイルが声をかけるが、ミナギは言葉少なだ。

ミナギは元々口数の多い方ではないが、ガルガン帝国の戦場でソウガに再会して以降は特に物静かで、この聖王国までの道中も皆の後を影のようについてくるだけだった。

どこか顔色も悪く、リーゼやカイルはずっと気にしていたのだ。

「大丈夫？」

リーゼも心配そうに言うが、ミナギは更に表情を固くするだけである。

「……それよりもカイル、以前ここに来たことがあるの？」

誤魔化すかのような、あるいはふと口をついたかのようなミナギの質問に、前を歩いていたカイルは足を止める。

「……何でだ？」

怪訝そうな顔をして振り向いたカイルだったが、内心の動揺を全く出さなかったことについては自分で自分を褒めたい気分だった。

「妙に迷いない足取りだったから、気になっただけ」

誰しも、初めての地ならばその歩みは周りを確認しながらになり、普段の歩き方とは差が出るものだ。宿名を聞いただけで動き始め、足取りに迷いないカイルを、ミナギは不思議に思ったのだろう。

「北部地区と言っていたからな、単に北に向かったただけだぞ」

かつてのこの地での苦い記憶が蘇る中、カイルは淡々と自然な声で答え、上手く誤魔化せたとはつとずする。

なおもミナギが何か喋ろうとしたとき、それを遮るようにセランの声が聞こえた。

「しっかし、何でおふくろはわざわざここに呼び出したんだ？」

「何か意味はあるだろう……色々予想はできるが、まだ何とも言えんな」

セランが首を捻ると、ウルザも思案げな顔になる。

不意に会話が途切れた形になったが、ミナギにとつてもそれほど意味のある話ではなかったらしく、それ以上の追及はなかった。

「カイル、お前は心当たりあるか？」

「解ってもらおう、とか言っていたからな……ここでなければいけない理由があるのは間違いないだろうが……やはりこの国の特色である聖地や神々に関係していると思う」

説明だけならどこでもできるはずなのに呼び出したということは、場所が聖王国であること自体に何か理由があるはず。

ここで見せたい、感じさせたいものがあるということだ。

「他に何が有名かといえば……やっぱり『輝かしき』サキラ王女よね。あたしでさえ知ってるくらいなもの」

『輝かしき』サキラ王女——この聖王国の王女にして、人族全体で三人しかいない特級魔法の使い手、更に神々の力を借りる神聖魔法をも使えるという特異な王女のことを、リーゼは口にした。

この聖地を治める聖王家は、神話において大地母神カイリスから人族の中心となつて皆を導くよ

う命じられた、【覚者】と呼ばれた指導者の末裔だと言われている。

サキラ王女は現在の聖王の一人娘で、つまりは次代の聖王となる。

「どんなお姫様だろ？ 会えないかな」

リーゼは生まれも育ちも一般人である。だが、これまでの旅でジルグス王国やガルガン帝国という世界全体でも頂点に位置する国の王女達に会ったことで距離感というものが麻痺したのか、何でもないことのように言うのであった。

「確か人族史上最高の魔力を持っている……とかいう噂だったな。妾を差し置いてそのようなことを言われる者がおるとは……面白い」

そうシルドニアは不敵に笑い、リーゼとはまた違った意味で会ってみたいものだな、と宣った。「そもそも見るのも難しいようだがな。あのお姫様達と違ってサキラ王女は滅多に人前には出す、姿を見る機会なんてまずないそうで、精々絵姿が出回ってるくらいだ」

露天の土産物屋には、サキラ王女の絵姿が飾つてあるのをあちこちで見かける。その姿は大概が穏やかに微笑む銀髪の女性であるものの、よく見ると店によって結構な差異があった。

つまり実像がはつきりしないくらい人前に出ないということで、それ故に神秘性が増し、崇拜すらされていて、特にこの都市ではほとんど現人神のように扱われている。

「ふーん、どれも美人ではあるな……」

どの絵姿でも共通しているのは、どこか現実離れた、神々しささえ感じられる美しい姿であること。しかしその絵姿を見ながら、セランは酷く顔をしかめている。

「どうした？　いつものようにはしゃがないのか？」

いつもなら美人と聞けばすぐに反応するセランのだが、今日に限って妙に大人しいのをウルザが訝しんだ。

「いや、流石に今までの経緯からしてなあ……何かあるんじゃないかと疑っちゃおう……」

ジルグス国やガルガン帝国の名だたる美姫達の、噂や想像とかけ離れた実情を見て理想と現実の違いを思い知ったのか、苦い顔にならざるを得ないらしい。

「とはいえやはり見られるものなら見てみたいし、会えるなら会ってみたいがな」

「ま、さっきも言ったが、そうそう会えるものでもないからな、気にすることはないだろ」

カイルは何気なくそう言い放ったのだが、他の皆は「またそういうことを言う……」と呆れ顔で嘆息し、妙に確信めいた予感を覚えていたのだった。

### 3

北部地区には、巡礼者のための宿が固まっていた。レイラの指定した『森の湖畔』は大通りから外れた石造りの建物で、数ある宿の中でもこじんまりとした佇まいだ。

「いらつしやいませ」

中に入ると、静かな声に迎えられる。

声の主はカウンターに座って帳簿をつけていた二十代半ばくらいの女性で、物静かな印象の美しい人なのだが、どこことなく陰も感じさせる。

「おお！　儂げな美人！」

反射的に歓声を上げたセランが、隣にいたウルザに思い切り足を踏まれる。

「こほん……宿をとりたいのですが」

実は同じ印象を受けていたカイルは、欲望に素直な悪友を反面教師として、努めて感情を出さずに話しかける。

その女性はセランの奇声にも動じず、接客用の笑顔のままでも申し訳なさそうに言う。

「申し訳ありません、今予約で埋まっています……」

「紹介で来たんだ。レイラという人から何か聞いていないかな？」

カイルがレイラの名前を出した途端、事務的な対応しかなかった女性の態度が一変する。

「まあ！ それではあなたがカイル様ですか！ お待ちしておりました！」

満面の笑みとなり、持っていた羽ペンを投げ捨て、駆け寄ってくる。物静かそうな第一印象からは劇的といってもいい変化だ。

「レイラ様からお話は伺っております。本当に……本当によくおいでくださいました！」

大げさな表現ではなく、本当に感極まったかのように、目に涙さえ浮かべていた。

少しばかり異様な歓迎ぶりに戸惑うカイル達を見て、女性は我に返ったような声を出す。

「し、失礼いたしました！ レイラ様によくやく恩を返せるのかと思ひまして、つい興奮を……申し遅れました、私はこの宿の主人でダリアと言います」

慌てて恥じ入ったように深々と頭を下げるダリア。

「長旅でお疲れでしょう、お部屋に案内致します。すぐに食事の用意も致しますので」  
そうしていそいそと、カイル達を二階の部屋へと先導した。

案内されたのは二階の奥まった部屋で、宿の外観から想像していたよりも広く、寝室も二つある

ので、男女を分けて六人全員が一緒に泊まれる。

室内は入念に掃除され、花瓶には活けたばかりであろう花も飾られており、鼻をくすぐる良い香りがほのかに漂っていた。

バネの利いたベッドにかけられたシートも洗い立てのようで、リーゼは部屋に入るなり、緊張から解放されたかのようにそのベッドに腰かける。

他の面々も同じく気を緩める中、カイルも大きなため息をついて全身を弛緩させたいと思いきや、すぐさま気を取り直した。

「まだ気を抜くのは早いな……」

レイラとの対決は先延ばしになった形だが、ここで油断するわけにはいかない。

長年の積み重ねにより、根本的なところではレイラのことを信頼しており、今更戾に嵌めてくるとも思わないし、数日待てと言う以上は大人しくそうするつもりでいる。

だがメーラ教徒が関わっていると話と話は別だった。狂信とも言える彼らの異常性はこれまでのやりとりでよく解っていた。レイラの意思が及ばないところで、何か問題が起こるかもしれないのだ。

特にエルフであるウルザの周りには注意が必要になる。来る前には、彼女を安心させるために危険はないと言っておいたが、この都市にいる間は決して一人にさせないようにしなければならない。

必ず守る——そんな思いを籠めながらカイルはウルザを見るが、当の本人はシルドニアと今日の夕食に期待して談笑している。

「……他に客はいないようね」

軽く周囲の気配を探ったミナギが、貸切状態にあることを確認する。

「しかし二、三日待てと言われてもなあ……何してろってんだ」

そうセランがぼやく通り、正直なところ手持ち無沙汰むさたの状況だった。

今日はもう昼も大分過ぎた時間なので、少し休憩すれば夕食になり、その後は早めに休む予定だが、明日以降はどうしたものか。

「流石に宿に籠りつきりというわけにもいかないからのう。明日くらいは散策せぬか？」

シルドニアの提案に、カイルは少し考えてから、その案に頷いた。

警戒を途切らせるわけにはいかないが、かといって緊張しっぱなしでは精神が持たないので、ある程度は弛緩させた方がいい。

何より、この都市について色々と知っておきたいということもあり、結局明日は情報収集という名の観光をすることにした。

カイルは明日どこに行こうかと相談している女性陣から、リーゼだけを廊下に呼び出す。

「明日は俺は別行動を取るつもりだ、だから……」

「……ウルザを一人にしないように、つてことでしょ」

言わなくても解つてる、と言わんばかりにリーゼは答える。

カイルとしては勿論自分の力で守りたいが、メーラ教の目的はあくまでカイルであつて、一緒にいた方が危険かもしれないのだ。

「その通りだ、面倒かもしれないが頼む」

この言葉を聞いた瞬間、リーゼはむっとした顔になり、軽くカイルの胸を叩く。

「何が『頼む』よ！ そんなのカイルが頼むようなことじゃなくて、当たり前じゃない！」

リーゼにとつてウルザは大切な友人で、その身を案じることは当然であり、頼まれてするようなことではない——そう言っているのだ。

「そ、そうだったな……すまない」

あまりの剣幕に面食らうカイルだが、リーゼの言うことは正しく、そして嬉しかった。

「だから謝ることもないって……カイルがそういうところに鈍いのは昔からだから、仕方ないわね。許してあげる」

呆れたように言うリーゼだが、その声色はどこか優しい。

「じゃあ明日はミナギも一緒に……」

「いや、ミナギには色々調べてもらいたいから単独行動を……おごっ!？」

リーゼは無言で、そして今度は本気でカイルの腹に一撃を入れた。

それは「鎧徹し」と呼ばれ、防具の上からでも肉体に衝撃を与えることができる技だった。以前も喰らったことがあったが、技のキレが増していることをその身をもって実感するカイル。

膝をついたカイルを見下ろすリーゼの目には、先ほどよりもはっきりとした怒りの感情が表れている。

「今……許すって」

「これは別！ ミナギはこれから育ての親と戦うかもしれないから、凄く不安になってるんだよ？なのに一人で行動させようなんて、気遣いがないんだから！」

「……………」

リーゼの言葉にカイルはハッとさせられ、腹を殴られた直後にもかかわらず、頭を殴られたような気分になる。

「セランみたいにレイラさんとの戦いを楽しみにしてるような戦闘狂と違って、ミナギはあたしやウルザと同じ普通の女の子なんだからね！」

リーゼは、裏稼業の専門家で暗殺さへこなす「シノビ」であるミナギを、自分達とそう変わらぬい、不安を抱えた一人の女の子として扱っている。ミナギ本人は、そんな扱いを受けているとは思ってはいないだろうが。

カイルは今までミナギをそういった目で見ただけではなく、仲間として気を配ることは勿論あるにしても、弱い存在だとは露ほども思っていないなかった。

出会った直後こそ、『大侵攻』時と違いまだ経験を積んでいない彼女に戸惑いを覚えたにせよ、変わらぬ実力を知った後はそれも消え失せた。

だが帝国の内戦で、師にして育ての親であるソウガと敵対する関係として再会して以来、確かにミナギは精彩を欠いていた。そしてカイルはそのことに気付いてはいても、あまり意識してはいなかった。

他に色々と問題が多すぎて、そこまで気が回らなかったという理由もあるが、ただの言い訳に過ぎない。

「解った、まったくその通りだ……ミナギと一緒に行動して気にかけて……いや、これもわざわざ俺が言うことじゃなかったな。二人を任せた」

カイルは自分の幼馴染を心から信頼し、二人を任せることにする。

——『竜殺し』の英雄であるカイルを一撃で悶絶させることのできるリーゼが、自分を普通の女の子と言っている点には、あえて触れないでいた。

「ん、任せなさい」

とん、と自分の胸を叩くリーゼに、カイルは頼もしさと感謝を感じる。



「いつも、ありがとうな」

「お礼を言うことでもないでしょ」

リーゼはそれ以上は何も言わずただ笑って部屋へと戻り、明日の予定を決めるべく、気乗りしない様子のミナギに積極的に話しかけた。

そんなリーゼを相手にしながら、ミナギはいつもと同じように困った表情を浮かべているが、以前と違うのは僅かながらも笑顔を見せる点だ。

カイルの知る、かつて『大侵攻』で共に戦ったミナギは、周囲に対する威嚇や不敵さを見せつけるための作り笑顔ならしていた。しかし今のような自然な笑顔を見せたことはない。

これは急に変わったわけではなく、徐々に起こっていた変化であった。ようやくそれを理解し、側にいながら今まで気付かずにいた自分を、カイルは恥じた。

そしてミナギの憂いを含んだ笑顔を見て、僅かに心が騒めくのを感じる。

カイルはこのとき初めて、ミナギを頼れる仲間としてではなく、一人の女性として意識した。

夕食の時間、一階の食堂はやはり貸切状態で、宿の者もダリアの他には従業員らしき少女が一人いるだけ。しかし、テーブルの上には手の込んだ料理ばかりが、まるで敷き詰められるようにして並べられている。

「このシチューの肉の柔らかさだけど、一昼夜は煮込んでるわ。準備してってくれたのね」

感心しきりなのはリーゼ。シチューの他にはすり潰した芋や鶏肉を油で揚げたもの、生野菜のサラダやデザートが食卓に彩りを添えている。

揚げ物が多めなのは、旅をしている間は油を多く使った料理ができないからという気遣いからであり、饗（きやう）（きょう）そうという真摯（しんし）な想いが伝わってくる。

「皆さんにお気に入りましたよ。ただ何よりです」

丸々と太った山鳥の丸焼きを切り分けているダリアは、本当に嬉しそうだ。

「こういう細やかな気配りができる年上の女性っていいよなあ」

うんうんと感動したかのように頷くセラン。

「あ、それとちょっと聞きたいんだけど、何でそんなにおふくろに恩を感じてるの？」

デリカシーというものが欠如しているセランが、続けて直球で訊ねた。

だがカイル達も気にはなっていたので、口は挟まずに耳を傾ける。

「私は以前レイラ様に命を……いえ、人生そのものを助けていただいた御恩があります」

そこには心からの感謝があった。

詳しい話を聞くと、ダリアはかつて大陸東部にあるフォオオンという国の国境沿いで暮らしていたという。しかし五年前に民族間抗争が起こり、住んでいた町が襲われた上に兵士だった夫が重傷

を負い、自分も命が危うくなったところを、レイラに助けてもらったとのことだった。

夫の療養を兼ねて安全なこの地で再出発したが、夫の方は二年前に病で亡くなり、それ以来一人でこの宿屋を切り盛りしているようだ。

「ここで宿を始めるときにもお力添えを頂きました……そのレイラ様からの初めての頼まれ事です、やっと僕かでも恩を返せると思ひまして、つい気が逸つてしまいました」

「レイラは当時のことを思い出したのか、少し涙ぐんでいる。」

「おふくろがねえ？」

驚きの声を上げたのはセラんだ。レイラがそんなことをしていたとは全く知らなかったのだ。

確かにレイラはリーゼに居を構えてはいてもあまり寄りつかず、年の四分の三は放浪していた。その間に各地で人助けをする流浪の聖人のような真似をしていたとは、義息のセランでさえ思いもよらなかった一面だった。

「レイラは、自分と同じように助けてもらった者は数多くいると言う。」

「どこで何やってんだかよく解らんおふくろだな」

「でも、レイラさんらしいと言えましょうよ」

「リーゼも、子供の頃からの付き合いであるレイラの善行を嬉しく思うらしい。」

「それで明日のご予定はお決まりですか？」

「ダリアが何気ない様子で訊いてくるので、カイルが代表して答える。」

「少しこの都市を見て回ろうと思う」

「そうですね、では聖都の地図を用意しておきますね……食後のデザートもありますので、皆さんどうぞ食べてくださいね」

「こうして和氣藹々と食事は進んでいった。」

#### 4

「で、こうなるのか……どうしてこうなった？」

「知るか、こつちが訊きてえよ」

翌朝、宿の前でカイルがぼやき、セランが嘆いていた。

「それじゃあたし達も色々見て回って来るからね」

「リーゼが遠くから二人に向けて大きく手を振っており、その後ろにはウルザとミナギ、シルドニアがいる。」

色々と思惑があった末、結局男女で別れて行動することになったのだ。

こちらも笑顔で軽く手を振り応えた後、カイルとセランは顔を見合わせ、二人揃って大きなため息をついた。

「何で野郎二人でお出かけせにやならんのだ、どうせなら女の子と行きてえよ」

「俺だってお前と顔を突き合わせながらじゃ息抜きにはならないぞ」

お互い遠慮抜きで悪態をつきたい放題だが、それでも険悪な雰囲気になることはない。この程度は、故郷のリマーゼにいたころから日常茶飯事なのだ。

今日はこれと言った目的を定めずぶらつくだけの予定で、セランが必要になることは特にない。

ただ、単なる暇潰しのようでもあるが、一応意味はある。都市の雰囲気を感じるには、肌で感じるのが一番なのだ。

例えば、店先の商品を見れば物品の流通具合が解るし、道行く人々の表情からは生活に満足しているか不満が溜まつているかが解る。初めて来た都市では、このようにあてもなく散策することがよくあった。

もっともここは聖都であり、通行人の多くは巡礼者で一時滞在者に過ぎないので、今回はやはり気分転換の意味合いが大きい。

「何なら宿に残つてもいいんだぞ？」

ぶつぶつと文句を言い続けるセランに、カイルが言う。

だがセランは急に真顔になり、どこへ向かうでもなく歩き始めた。

それを怪訝に思いつつカイルも後をついて行く。

「何かあの宿、居心地が悪いんだよなあ……」

セランがぼそりと呟いた。

「どういう意味だ？」

ダリアによるそれこそ下にも置かないもてなしに、カイルは自分も含め全員が満足しているものだと考えていたので、思わず訊ね返してしまった。セラン自身も「未亡人……それもまた良し」などどほざいていたくらいだ。

「嫌な気配……と言うほどでもないが、どうも落ち着かねえ」

「そうなのか？ むしろあの女将おかみのこと、気に入っていたじゃないか」

「気に入ったというより、気になったという感じだな。おふくろに恩があるのは事実で、嘘は言っていないだろうさ。だがどうもひつかかってな……」

さらりと、真剣味を感じさせずに言ったセランに、カイルは真面目に取り合う。

「勘か？」

「勘だ。一番ありそうなのは、おふくろの命めいで俺らの監視をされていて、それを逐一報告してるところかな？」

ここまで言われて、カイルはダリアの言っていたフォロンという国について思い出したことがあった。

フォロンは比較的新しい人間の国だが、山岳地帯には建国前から住む獣人も多くいて、人間と獣人の軋轢が多いとも言われている。

ということとは、ダリアの住んでいた町を襲った可能性が一番高いのは獣人かもしれない。そして、人間至上主義のメーラ教が廃れない理由の一つに、巫人との抗争がある。

(ダリアもメーラ教徒の可能性があるな)

確信があったわけではないにせよ、それを念頭において行動した方が良さそうだった。

「それと、あの宿を出てからどうも視線を感じる。付けられてる感じだ」

そう言われて急に振り返るような真似をするカイルではないが、それとなく周囲の様子を探る。

しかし、その気配は感じられない。

「尾行か？」

「いや、どうもはっきりとしない。気にしすぎと言われりや否定できないレベルだ」

セランにも確信はなく、これもあくまで勘でしかないという。

だがセランは昔から野性的なところがあつて直感に優れており、更にここしばらく実戦を重ねて死線を潜り抜けてきたせいも、更に感覚が冴えわたっている。

こういったことに関しては、セランの方が優れているという自覚はカイルにもあつた。

「息抜きのつもりだったんだがな……こつちに来てくれたのならありがたい」

セランの言っていることは根拠などないただの勘だ。それだけを理由に自分達に良くしてくれたダリアを疑うのは酷く失礼な話になる。

だがそれでも、どちらを信じるかとなれば、カイルは迷いなくセランを選ぶ。

「師匠は待てと言ったが……ただ座して待つのに向いていないからな」

どうせちよっかいをかけられるならば女性陣に向かわれるよりもまだと、カイルは自分を餌にしておびき寄せようと試みることにした。

「うーん、ちつと堅苦しい雰囲気だよなあ」

しばらく歩いた後、セランが少し不満げな声を漏らした。

聖地だけあつて周りにはやはり巡礼者が多く、そのほとんどが敬虔な信者だ。

大抵の神には信者を律する戒律があり、中には厳格なものも多い。そのためか聖都は歌舞音曲を控える傾向にあり、広場に大道芸の見世物や吟遊詩人の歌声もなく、代わりに辻説法を行う神官の声が響いている。

そんな非常に健全な都市の生・真・面・目・ぶりが、セランにはどうも水が合わないのだ。

「これくらいの都市には必ずある裏通りもねえな」

セランが言っているのは所謂悪所あくしょで、表通りには出せない店が立ち並ぶ場所のことである。

「素直に観光しろってことだろ」

「つまんねえな……おつ、流石に屋台はあるな」

屋台の定番である肉の串焼き屋を見つけ、早速そちらに向かうセラン。

カイルもそれについて行くこうとする途中、別の出店にあった土産用の民芸品の中に、青水晶を削り出した鮮やかなアミュレットを見つけた。

「おや、お目が高い。これはこの地方に伝わる幸運を招くお守りです……」

店主が営業用の笑顔で愛想よく説明してくる。

その説明自体には興味をそそられないし、見た限り魔法的な加護はないので、この伝承も嘘に違いない。

ただ確かに目を惹く美しさがあり、色違いで赤や紫など様々な種類が揃っていて、買うのもやぶさかではない品だった。

「ふむ……」

特に緑水晶のものはウルザが好きそうだな、と思って見ていたカイルに、横から声がかかる。

「ところでカイル、お前最近ウルザとの仲はどうなんだ？」

串焼き肉を頬張るセランにさらりと訊かれ、カイルはまるで心を読まれたみたいで思わずうろたえてしまう。

「ど、どういう意味だ？」

「いや、どう見てもウルザはお前に気があるだろ」

「……………」

はつきりと言われてしまい、カイルは言葉に詰まる。

これはカイルが長いこと棚上げしてきた問題でもあった。

カイルはリーゼもウルザも両方好きだし、その二人が自分に好意を持ってくれているのは解っている。それでいて、はつきりとした態度は示していないのだ。

無論カイルにも言い分はある。死に別れたはずの最愛の二人とほぼ同時に再会するという普通では考えられない特殊な事情のせいで、そうなっているのだと。それに、前世ではリーゼが死んだ後にウルザと出会っていて、同時進行であったことはない。

そして確かにこれはこれで大問題ではあるがあくまで個人的な問題に過ぎず、世界を救うという大義の前には些末事、そう自分に言い聞かせていた。

そのため二人にははつきりとした言動は示せないが、それでいて離れたくはないし嫌われたくない。だから適度な距離を置きつつも嫌われないよう機嫌をとったりするという、ある意味最低極

まらない態度を続けてきた。

幸いリーゼもウルザも特に文句なくついてきてくれるし、更に当人同士も仲が良かったため、これまでの旅の間に問題は起こらなかった。

だが今の状態が危ういバランスの元に成り立っているのは間違いない、何かの拍子に一気に崩れかねない気もする。

だが、一緒に旅をしているセランは、当然ながらそんなカイルの態度に気付いていた。

「お前のことだから、どっちにも嫌われるのを恐れてどっちとも良い距離を保とうとしている感じだな」

ぐいぐいと心のうちに踏み込んでくるセラン。しかしカイルもこれを鬱陶しくは思っても、不快とは思わない。

お互い隠し事などない……正確には、隠し事をして無駄と思っている、幼馴染にして悪友という間柄だ。

(いや、隠し事は一つあったな……あれはどうしたものか……)

セランだけでなくリーゼやウルザ達にも一つ、とてつもなく大きな隠し事をしているのを思い出し、カイルの心に少しだけ陰りが差す。

嫌われるのを恐れている、というセランの言葉が心に刺さった。

「まあともかくだ。俺はカイルを信じてるからな、女を泣かすような真似はしないって。ただ後悔だけはするなよ」

セランはカイルに向けて親指を立て、爽やかな笑顔で言った。

「……本音は？」

「どろどろの三角関係にでもなつて、痴情のもつれで刺されて、撲殺されてしまえこのクズ野郎」  
くるりと親指を下に向け、とつと地獄に落ちろと言うセラン。

しかしその暴言にこれと言った反論ができないのも事実で、リーゼはあれでいて結構嫉妬深いし、ウルザも気は強い。今後の展開次第では充分ありえそうさ。

ただ今のところ、リーゼはウルザやミナギに関して特に何も言わず、むしろもっと気を遣えと言うぐらいで、彼女の中に何かしらの線引きがあるのだろう。

ウルザもまたリーゼと仲が良いので、それに甘えているのが現状だった。

「お、俺にだっているいると事情があるんだ！」

そう言い返すのが精いっぱいのカイル。

「くそ、何でお前だけ……以前は俺と同じく全くモテなかったくせに」

ぶつぶつと文句を言い、僻みモードに入ったセランをこのまま放置しておくのは面倒だと判断し、カイルは話題を逸らすことにした。

「…：そういうセランはどうなんだ、最近は何願叶って女性に好かれてきているじゃないか」  
この手の話題での反撃材料がようやく出来たカイルがこぞとばかりに言う、セランはどんな顔つきになる。

「お前、解ってて言ってるだろ」

昔から女好きを公言してはばからないセランだが、その性格が災いして実際に女性と縁があったことは皆無だった。

しかし最近は何かに好意を持ってくれている女性も出来た。とはいえ、一人は下手に手を出せば世界最大国家を敵に回しかねないし、もう一人は人族ですらない。どうしろってんだ、というのがセランの素直な気持ちだ。

「皇女と魔王だもんな。セランも数奇な運命を歩んでいるというか…：俺も応援してるから頑張れよ」

出店で買った冷えた果実を頬張りながら、カイルも一応気遣った言葉をかけるが、実際に手助けするつもりは毛頭ない。

どちらも接し方、扱い方によっては戦争にさえなりかねない相手であっても、全てをセランに任せている。

根本的な所では、この幼馴染を信頼しているのだ。

(まあ問題になったら、責任を取るという形でセランを生贄いけにえに差し出せば、何とでもなるか…：)  
自分のことを棚に上げ、そう結論付けるカイルだった。

## 5

次にカイルとセランが向かったのは、この都市で最も有名な塔だった。やはりと言うべきか、辺りは同じような人でごった返している。

「あれが始まりの塔か、やっぱり近くで見ても小さいな」

セランの言う通り、遠目の印象と同じくそれほど高くはなく、造作は確かに特徴的であっても、ちよつと大きな国の首都ならばこれを超える大きさの塔などいくらでもある。

塔を囲むように立っているのが、通称聖宮殿と言われている聖王家の宮殿で、そのせいで塔の下半分は見えなくなっている。

あの宮殿に聖王やサキラ王女が住んでいるはずだが、ガルガン帝国やジルグス王国のそれと比べれば、その規模は民家と大差ないように思えてきた。

だが周りを見れば、世界創世の塔に向かって手を合わせたり、五体投地をしたりして祈りを捧げ

る者がおり、いかに象徴的な存在かを表していた。

「にしても……ちよいと不用心すぎる気がするんだが？」

宮殿の周りは人の背丈より少し高い簡単な柵が立っているだけだし、何より警備する者がほとんど見受けられない。実際に侵入して何をするというわけではないが、容易に実行できそうに思ってしまう。

「言われてみればそうかもしれないが、そんな罰当たりなことを考える奴なんていないんじゃないか？」

「そうか？ ……まあ俺の心配することじゃないか」

カイルの指摘に首を捻りながらも、セランはまあそんなもんと興味を失ったようにその場から離れ、人の流れのままに歩き続ける。

「何だかこれも、妙に人が多いな？」

特に目的もなく人の流れに任せて歩いているのだから、やはり名所に行きついたようで、周りは巡礼者でいっぱいだった。

この群衆のお目当ては、目の前にある壁にあった。かつては鮮やかな色彩を持っていたであろう壁画だ。

「これがヴィックスの壁か。様々な神話が描かれていることで有名だな」

描いたドラゴンがあまりにも精密で、自分は生きていると勘違いした当のドラゴンが動き出したという伝説を持つ稀代の画家ヴィックスが、十年の時をかけて描いた壁画である。

その中でも特に目立つのは、やはり大地母神の名を冠した主神であり、また今カイルと深い関わりがある女神メーラの双子の妹と言われている、女神カイルスだ。

この世界で最も信仰されている神だけあって、カイルスに関する神話は多く、壁画に占める割合も大きい。カイルはそのうちの一つに目を留めた。

それは女神カイルスの前で、神の使いと言われている天使と、人間の戦士が剣を合わせて戦っているというものだ。

「えっと……これって確か、名も無き英雄の神話だっけ？」

見入っていたカイルの横から壁画を覗き込んだセランが、思い出したかのように言う。

「お前でもそれぐらいは知ってたか」

「とりあえず知ってるだけだな、どんな話かはよく知らね」

自分から言っておきながらそれほど興味はなかったようで、欠伸あくびをしながら答えるセラン。

「これは、神が直接地上に姿を現す【降臨】をして影響を与えた、数少ない例だ」

思うところがあるのか、カイルの声は静かだった。

今から二千年以上もの昔。当時、このロインダース大陸の南には巨大な島があった。



その島には人族も魔族も住んでいなかったが、豊かな自然があったので多くの動植物が住んでいた。しかしあるとき、その島の中心部にある割れ目から正体不明の瘴気しやうきが吹き出し始めた。

ありとあらゆるものを蝕むしばむその瘴気によって、島は瞬またく間に草木一本生えない死の大地になったという。

そしてとうとう瘴気は島から溢れ、まるで生あるものを求めるかのように海をも腐らせながら、ロインダース大陸に向かい始めた。

このままでは遠からずロインダース大陸も同じように滅びると憂えた一人の人間が、神に助けを求めた。それに応えたのがカイリスだ。

神とその人間との間にどのようなやりとりがあったかは知られていない。しかしとにかくカイリスは試練を与え、人間はそれを見事に達成したという。

その褒美として、カイリスは【降臨】して力を振るい——結果、件くだんの島そのものが消失し、ロインダース大陸は救われた。

神話にはそれだけしか伝わっておらず、名前の知られていない英雄がその後どうなったかさえ定かでない。

そしてこのとき以降、神は一度も姿を現しておらず、これが人の世界に神が直接介入した、ほとんど唯一の例と言われている。

「へえ、神様が直接ねえ。そりゃ楽だったろうな」

「ああ、本当にそうさ……本当にな」

祈れば助けてもらえることが当然だとは思わないが、絶たまつても助けてもらえない者の気持ちをカイルは痛いほど理解できていた。

神の遣わした天使と共に立つ名も無き英雄と、その背後で柔らかな微笑みを浮かべる女神カイリス。色あせた壁画を見ながらしんみりとした気分になっていると、そういった情緒を欠片も理解しない無遠慮な声がかかる。

「なあ、絵なんて見ても仕方ねえから別のところこうぜ」

「お前は気楽でいいよな……じゃあ次の場所に行くか。ちょっと行ってみたいところがあるのを思い出した」

カイルは、ダリアから渡されたこの都市の案内図を見ながら言う。

「どこだ？」

「メーラ教の神殿だ」

全ての神々の聖地であるこの都市において、女神メーラの神殿は都市の隅にあった。ぽつんと立っている神殿は背の高い柵によって、しかもかなり遠巻きに囲まれており、外からでは小さくしか見

えない。

「どうなつてんだこれ？」

柵は頑丈で、先ほどの聖王宮よりも厳重に警戒されているのを見て、セラランが首を捻る。

「封鎖されてるな……人気ひとけもないようだ」

カイル達の他にもこの神殿を遠巻きに見ている者はいるが、明らかに物見遊山ものみやさんで来たという感じで、メーラ教徒とは思えない。

「せっかく来たんだ、中に入れないのか？」

がしやがしやとセラランが柵を揺らしていると、そこに慌てて制止する声がかかる。

「ああ、おやめください」

声の方を見ると、聖職者であろう温和そうな青年が立っていた。

「この中に入つてはいけません」

「あーえっと……すみません」

こういった相手が苦手なセラランは、カイルに目で助けを求めた。

「同行者が失礼しました」

礼儀正しく謝罪したカイルを見て、相手も少しほっとした様子である。

「いえ、解っていただければ……私はカイルス様に仕える者です、この管理をしているラダイ

ンと申します」

礼儀正しくラダインがお辞儀をし、カイルも同じように返す。

「お訊きたいのですが、これはやはりメーラ教が禁教になっているからこそその処置なんでしょうか？」

「いえ、この地においては、たとえどの神の信仰でも許されております。これはむしろメーラ様の神殿を護るためです」

「護る、ですか？」

ラダインは顔を曇らせながら説明する。

「はい……ご存じかと思いますが、一部のメーラ教徒が亜人に対して痛ましい事件を起こしておりますので……」

「ああ、なるほど……」

人間以外の人族を排斥しようと、ときには無差別殺戮さえ行っているメーラ教だ。もしその被害にあった本人や遺族がこの地に来て、メーラの神殿を見たらどうなるか……容易に想像がつくというものだ。

よく見てみると、神殿はあちこち傷がついており、火を点けられた痕跡さえあった。

「いまこの地にメーラ様の信徒はおりませんので、私達カイルス信徒が見回ったり、定期的に掃除

立ち読みサンプル  
はここまで

を行っております」

カイリス信徒が管理を受け持っているのは、やはりカイリスとメーラが双子である面からなのだろう。

「道理で寂<sup>さび</sup>れてるはずだな」

セランが納得したように言う。

「信徒はいないのか……」

少なくとも表向きはそうなっているらしい。カイルとて神殿に来れば何かが解ると期待していたわけではないが、これ以上ここにいる意味はないようだ。

「色々とお話を聞かせてくださってありがとうございます。これは喜捨です、どうかお受け取りください」

カイルが紙に包んだ金貨を差し出す。こういった場合、お金を渡すことは一般的な行為で、ラダインも抵抗なく受け取り、カイルのために祈りを捧げる。

「これはありがとうございます。あなたにカイリス様の祝福がありますように……」

敬虔な信徒であろうラダインに祈りを捧げられ、カイルは複雑な気持ちながらも笑顔でそれを受け取った。

「何か話したら腹減ったな、何食う？」

「お前は何も話してないだろうが……というかお前、あれだけ屋台で食ったくせに……」  
結構な量を食べ歩いていたはずのセランに、カイルは呆れを見せる。

「じゃカイルは食わんのか？」

「いや、食べる食べないなら、勿論食べるに決まってるだろ」

セランとほぼ同じくらい食べ歩いていたカイルがすぐに同意する。

「ここが聖都じゃなければなあ、今日は何か飲みたい気分だ」

普段そこまで飲むわけではないセランも、偶<sup>たま</sup>に痛飲することがあり、今日はそんな気分らしい。この聖都にも酒場はあるにはあるが、今のような昼間から開いているところは流石にない。店がやっているのはせいぜいが夕方から宵<sup>よ</sup>の口<sup>ぐち</sup>までで、深夜には聖都全体が外出禁止となる。

「普通の飯屋でいいだろ、どこか適当な……」

ここで、カイルの歩みがほんの僅かだけ乱れた。

「なあ……」

「ああ、解ってる……」一応言っておくが、これじゃねえぞ。いくら何でもこんなあからさまじゃねえ。別口だ」

「そりやそうだ……今ははっきり、誰かが俺達を見ているな」